

学会記事

◎ 通常総会

昭和 32 年 6 月 1 日午前 9 時から北海道大学中央講堂において開催されたが、出席会員は約 400 名をかぞえ、きわめて盛会であつた。会の次第は次のとおりである。

米田副会長の開会のことばについで、平山会長が議長席につき

昭和 31 年度事業報告 (別掲, 東総務部長)

昭和 31 年度決算報告 (別掲, 飯吉経理部長)

を行ったが、満場一致拍手をもつて承認された。

写真-1 通常総会会場



名誉員推挙 平山会長から元会長 平井喜久松君, 元関西支部長 永井専三君および元北海道支部長 小野諒兄君を名誉員に推薦, 別掲の推薦理由をのべて一同にはかつたところ、満場一致拍手をもつて賛同、ただちに推挙状を贈呈した。

昭和 31 年度土木賞授与 沼田委員長から土木賞委員会の経過説明があり、別掲の授賞理由をのべたのち、平山会長から正員 熊川信之君および正員 村上永一君に学会賞が、正員 能町純雄君および正員 山内利彦君に奨励賞がそれぞれ授与された。

新任役員の紹介 平山会長から昭和 31 年 5 月 28 日の常議員会で選挙決定した昭和 32 年度新任役員の紹介が行われた (別掲参照)。

会長講演 (別掲)

10 時 50 分米田副会長の閉会のことばをもつて総会をどこおりに終了した。 (河野 記)

◎ 第 12 回年次学術講演会

通常総会に引続いて、同会場でただちに年次学術講演会に移った。最初に小川北海道支部長の挨拶があり、ついで特別講演として、北海道総合開発委員会副委員長・北海道大学工学部長 大坪喜久太郎氏の“北海道総合開発について” (別掲) および北海道図書館・郷土史研究家 更科源蔵氏の“北海道の古代史” (別掲) の講演があり聴講者に多大の感銘を与えて 12 時 20 分午前の部を終了した。

13 時からは会場を北海道大学工学部にうつし、学術講演会を部門別に開講した。このたびの講演申込数は 195 編の多数にのぼつたが、聴講者の便宜を考慮し、会場数は極力少くして 5 会場とした。そのため恒例の土木賞受賞者の特別講演を割愛し、また学術講演は 1 編あたり交代時間も含め 15 分として討議を省略する等の措置を余議なくされた。新しい試みとしては、今回はじめてスライド併用による講演を採用したが、短い時間を有効に使うものとして好評を博した。各会場とも全国各地から参集した講演者の貴重な研究発表に熱心に耳を傾ける聴講者が場内を埋めつくし、ときには場外にまであふれるほどの盛会のうちに 16 時 30 分予定どおり第 1 日を終了した。第 2 日は 8 時 30 分から、同会場で各部門の講演が続行されたが前日に劣らぬ盛況であつた。2 日間を通じて参集した聴講者は延べ約 1 500 名をかぞえ、盛会かつ有意義のうちに第 12 回年次学術講演会の幕を閉じた。

なお各部門の講演数および司会者を次に示す。

写真-2 学術講演会会場



写真-3 同上玄関



第 I 会場 (応用力学・コンクリート・材料その他)

講演数: 35 (第 1 日 11; 第 2 日 24)

司会者: 能町純雄, 中村作太郎, 岡元北海, 伊藤部宗夫, 横道英雄

第 II 会場 (土質および基礎工学・測量)

講演数: 36 (第 1 日 11; 第 2 日 25) うちスライド 2

司会者: 宮川 勇, 河上房義, 山本 茂, 最上武雄, 三木五三郎, 真井耕象

第 III 会場 (橋梁および構造工学・施工)

講演数：37（第1日 12；第2日 25）

司会者：今 俊三，樋浦大三，有江義晴，平井 敦，猪瀬寧雄

第IV会場（水理・水文・河川および発電水力・ダム）

講演数：38（第1日 11；第2日 27）うちスライド1

司会者：境 隆雄，屋崎 晃，山岡 勲，林 泰造，米屋秀三，古谷浩三

第V会場（道路・鉄道・都市計画・港湾および衛生工学）

講演数：39（第1日 13；第2日 26）うちスライド7

司会者：松木憲司，小野一良，板倉忠三，高橋敏五郎，白石直文，林 猛雄

小川北海道支部長挨拶のことば

このたび通常総会および学術講演会を北海道で開催するにあたりまして、多数御参集いただきましたことは、当北海道支部といたしましても非常なよろこびに存じておるところであります。北海道において通常総会を催すことは実は今回がはじめてであります。また学術講演会につきましては昭和13年7月に開きまして実に19年ぶりのことでもあります。このたびの総会ならびに講演会に御参加のお申込みは600名を越えており、また御講演のお申込みは195という多数であります。これはひとえに本土木学会が最近非常に隆盛をきわめているという現われであり、誠に御同慶にたえないところであります。

これから学術講演会に入りますが、195編を5つの教室に分けて専門別に講演を願います。なおスライドによる講演の方法もはじめて採用いたしております。また講演のお申込みが非常に多数でありましたので、やむなく講演時間は交代時間を含めて15分にしぼりました。非常に時間を短縮いたしておりますので、この点をお含み願いたいと存じます。また恒例によつて土木賞受賞者の記念講演をいただくのでありますが、時間の都合でこれも割愛したことをお詫びいたすとともに、またこの点を皆様に御了承願いたいと思います。

講演会は今明日で終りまして、明後日から見学になりますが、このお申込みも非常に多数にのぼりました。見学につきましては皆様の御希望を極力お引受け致すように手配いたしております。どうぞ見学に出られましたら、本道の開発が経済計画会議その他でいろいろと批判されている昨今でもありますので、皆様が足で歩き目でごらんになったありのままの本道の姿を御認識下さいまして、土木技術者の立場から御批判や御助言をいただければ幸いと存じます。なお本大会の開催にあたりましては地元の各方面から多大の御賛助をいただきましたことを、この席を借りて厚くお礼申し上げます。（河野 記）

◎ 懇親会

昭和32年6月1日講演会（第1日）終了後、会場を札幌市郊外月寒に移し、月寒学院の野外で催されたが、^{ツキヤン}参会者は来賓を加えて269名という盛況であつた。会場

写真—4 懇親会場遠景



写真—5 懇親会場で挨拶する小川北海道支部長



写真—6 同上 平山前会長



はおりから咲きほこる白いリンゴの花と青々とした草原に足下を囲まれた小高い丘の上で、北海道らしい牧歌的の情緒に満ちあふれていた。気づかれていた前夜の雨もからりと晴れ渡り、関係者一同愁眉をひらくうちに、定刻17時30分板倉幹事長の司会で懇親の宴がくりひろげられた。まず小川北海道支部長の挨拶にひき続いて、平山前会長、内海会長からそれぞれ挨拶があり、ついで地元代表として高田札幌市長の歓迎のことばがのべられた。ここから開宴となり、羊肉を焼く煙の中で、平井・小野両新名誉員および土木賞受賞者熊川信之君・村上永一君・能町純雄君の挨拶があり、つづいて各支部代表のテーブルスピーチに入り、西部の田中寛二君、中四の網千寿夫君、関西の安宅 勝君、東北の河上房義君、北海道の猪瀬寧雄君、中部の中島 武君からそれぞれ抱負や所

写真一7 ジンギスカン鍋を囲み談笑する会員



見がのべられ、最後に米田副会長の挨拶が行われた。この頃から和やかな談笑の聲が会場を満たすうちに、余興として今井篁山師の見事なノドで北海道の民謡追分節・ソーラン節などが紹介され、参加者は先輩後輩の別なく手拍子をとつてこれに和し、樽詰めの本場サッポロビールとジンギスカン鍋に北海道の野趣を満喫した。最後に北海道土木界の長老斎藤静脩氏の発声で万才を三唱し、和気あいあいのうちに19時散会した。(河野記)

◎ 見学会 (6月2日, 3日, 4日, 5日)

総会、講演会に引続き恒例の見学会が4班に分れて行われた。その状況は下記のとおりである。

A班 (札幌市内コース)

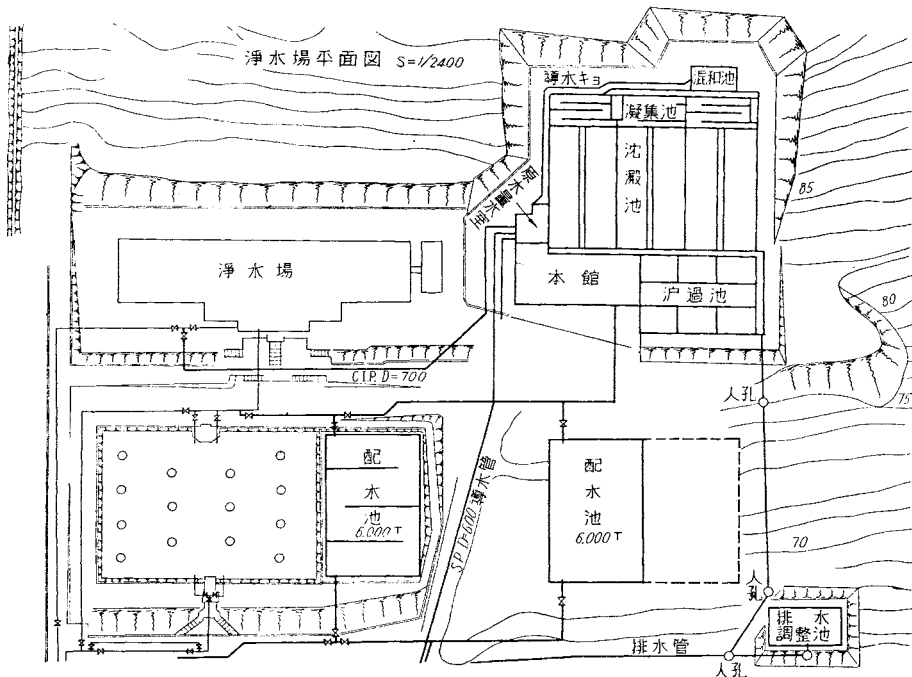
6月3日午前10時30分、札幌市バスセンターに集合した会員総勢40名は、小野諒兄名誉員を団長に、貸切市営観光バスで見学の行程を開始した。出発間際頃か

ら、あいにく小雨が降り出した。車中で案内嬢から沿線の豊平館・時計台・道庁などの説明をきき、10時40分北大付属植物園に到着、雨をもちとわず園内を見物し、園内飼育の籠にしばらく足をとめ、博物館でアイヌ風俗や北海道産動物の標本等を見学した。11時10分ここを立つて、凍上防止のため路床材料置換工法を施して快適なハイウェイとなつたアカシヤ香る一級国道5号線を西進して、車窓より大倉ジャンツェを眺めながら、先年国際スケートスピード選手権大会の行われた市営総合競技場や円山動物園を一周して、桜の名所円山公園に名残りをおしみつ南進し、札幌市浄水場第一期拡張工事建設現場に向う。車中で市水道部伊藤健二氏より事業計画概要並びに浄水場設備のあらましの説明をききながら、11時40分同現場着、現場主任永井勝技師の案内でただちに見学にうつる。昭和29年工事に着手し6カ年継続事業として予定工費8億4000万円、現在濾過池を建設中である(図-1参照)。

その計画概要は次のとおりである。

1. 取水河川名 石狩川水系豊平川
2. 取水位置 札幌市豊平町字篠舞
3. 給水区域 4965 ha
4. 給水区域内総人口 503000人
5. 計画給水人口 327000人
6. 1人1日あたり最大給水量 300 l
7. 1日最大配水量 98000 m³
8. 導水施設 600mm・350mm 鋼管
9. 浄水施設

図-1



- a) 敷地面積 8800 坪 b) 原水量室 460 m³
 - c) 混和池 77 m³ 1 池無段変速フラッシュミキサ
 - d) 導水渠 幅 1.5 m・深さ 1.5 m・長さ 77 m 1 条
 - e) 凝集池 375 m³ 3 池無段変速フロキュレーター
 - f) 沈澱池 1600 m³ 6 池
 - g) 濾過池 87.5 m³ 6 池 濾速 135 m/日
 - h) 浄水池 630 m³ 1 池
 - i) 付属本館 延 805 坪 4 階建
 - j) 排水調整池 960 m³ 1 池
10. 配水設備 配水池 60000 m³ 1 池
12000 m³ 1 池

その他オートメーション装置として、取水量自動調節装置・自動薬品注入装置・濾速自動制御装置がすでに発注済みであり、既設のものにくらべて人件費が 1/3 に節約できる予定である。会員の熱心な見学のあまり昼食をとる時間がほとんどなくなり予定時間を延長せざるをえなくなつたが、浄水場の旁で三井建設 KK の御好意により昼食の接待をうけ 12 時 40 分浄水場を後にした。

豊平川河畔にある中之島公園内を通過して午後 1 時日本ビール KK 札幌工場着、工場内をくまなく見学し、講堂で大越工場長から生ビール・黒ビール・プリスナービヤール・エール・スタウト等ビールの説明をきき、特にビールのおいしい飲み方の指導をうけ、生ビールの接待をうけて早速実験することができた。なお最近苦懐しのサ

写真—8 北大植物園内で醸の見学



写真—3 札幌市上水道浄水場濾過池
コンクリート工事



写真—10 日本ビール札幌工場にて



ッポロビールという商標を再び使っているが、この工場の製品は道外では販売していないとのことである。

サッポロビールに別れをおしみながら午後 2 時 10 分工場をあとにして午後 2 時 20 分雪印乳業札幌工場着、雪印アイスクリームの接待をうけながら松原常務より栄養源としての乳製品の説明をきき、予定時間の関係で残念ながら工場を見学できなかったが、展示室で概要を知ることができた。午後 2 時 45 分ここを立つて午後 3 時本見学会を解散した。

この記事を終るにあたり、札幌市役所・北海道開発局土木試験所の関係各位の御尽力、三井建設・日本ビール KK・雪印乳業 KK の御厚意に深く謝意を表す。

(小田代 記)

B 班 (石狩川流域コース)

見学者も地味なせいにか、この班は申込者も少く、欠席者もあつて、わづか 13 名の小人数であつたが、かえつてじっくりと見学できたことは幸いであつた。定刻より 3 分遅れ 8 時 23 分雨もよみの寒い風の中を 3 台のステーションワゴンに分乗して北海道庁の正門を出発した。途中札幌沼田線を北上し江別市にて石狩川を渡り、橋のたもとで下車、北海道開発局石狩川治水事務所の小島氏から石狩川水系改修計画について説明を受けたのち月形を経て篠津泥炭地区に入った。9 時 17 分新川橋に到着、厚い泥炭層を切りわつた篠津運河 (舟航用ではなく排水用) を見て、9 時 35 分開発局篠津事業所に到着した。寒さの中でまず何よりのもてなしであるストーブに一同一息つく。副長の松井氏より篠津原野の開発事業について詳細な説明をいただいた。この篠津地区は石狩平野の西南部に位し東南は石狩川、北は増毛山脈によつて囲まれた 16200 町歩の地域でほとんど泥炭土よりなり、低位泥炭・高位泥炭によつておほわれている。泥炭土は有機質が大部分を占め pH 4.4~4.8 と酸性の強いものである。この地域の水田は約 2700 町歩で石狩川の支流当別川に沿っている。現在のところ水不足のため畑にもどりつつあるという。その他の地区は泥炭地のままで未利用である。そこで昭和 26 年度より 6 カ年計画で国営のかんがい排水事業篠津地区土地改良事業が行われてき

た。さらに世界銀行から事業資金の融資を受けたので、検討を加えて地域内 11 730 町歩の開発を行い、米量換算 190 000 石の食糧を増産しようとするものである。すなわち地域内には用水不足のため補水を必要とする水田 2 700 町歩、容易に開田しうる畑または泥炭原野 9 030 町歩に対する用水を確保するため篠津運河を改修し、これを延長し石狩川に取りつけ取水セキを設け水を導入する。また河沿いに 10 数カ所の揚水場を設けかんがい用に供し、当別川上流には貯水池を設けて用水源の一部とする。また地域内の泥炭地湿地をはじめ、既耕地の地下水位を低下させるために篠津運河を改修し、これに排水支線を配し地区内の排水を完全にす。また泥炭地には客土を行って土地の改良を行い、産物の搬出のため幹線道路を作る等の事業である。説明をいただいたのち活潑な質問がなされて大いに知見をひろめた。

続いて北海道開発局土試験所の宮川氏から豊富な研究資料の御提示をいただいて、泥炭の性質、なかでも石狩泥炭の工学的性質について詳細な説明をいただいた。植物が低温多湿のため多少腐食化したまま多年集積したもので、地耐力がほとんどないため、その上に構造物を作る場合には大きな問題がある等のことについて、透水性、異方性、圧密性、支持力等々の土質工学的な性質をとり上げ、いわゆる土とはほど遠い泥炭土についての説明は興味深いものであつた。また事業所内に断面を取り出した泥炭の標本がおかれてあり、その構成を一目にして見ることを得た。本州の某氏は“泥炭というから石炭のようなものかと思つていたら、草と土の混合物のようなものでフワフワしている”と百聞は一見にしかずと大いに感心していた。10 時 40 分から篠津運河の掘削現場へ行き世銀融資により買入れられた重土工機械による全機械化土工の威力をまのあたりに見る事ができた。

ポンプ・ドレッジャー、ラダ・エキスカベータ、モータ・スクレーパ、クローラー・バケット・エキスカベータ、バケット・ローダが菜の花の咲く大原野に点々と散在して運河の掘削を続けている。泥炭は地耐力がないために、普通の土工機械を持込んでも埋まつて作業できないため、低接地圧用として特に設計された普通の 2 倍ぐらいも幅のある、キャタピラーを装着したブルドーザが作業を行つていた。この地区の工事の特長として大工事を短期でさばくために、大量の機械が投入されていることがあげられる。11 時 45 分現場を辞し、再び北上して石狩川を砂川橋でわたり、12 時 50 分東洋高压砂川工場（豊沼）に到着、ただちに昼食の接待にあずかり、藤本次長から工場の概要について説明をうけ、1 時 40 分から上建課長松本氏の御案内によつて硫安工場の一部を見学させていただいた。また大コンプレッサーの基礎の振動をとめるためにケーソンを用いている等、苦心の諸工法についても実地において興味深い説明を聞いた。

2 時 30 分東洋高压を辞し、地続きの北海道電力の新鋭火力砂川第二発電所に到着、ただちに本発電所生みの親であり育ての親である所長の蔵部氏から懇切な御説明をいただいた。この発電所は 35 000 kW の出力を有し（なお 35 000 kW 追加工事中）、一機一缶のエニット式で、ベースロード発電所として年間利用率 60 % 以上で、運転操作は極力自動化し、日本で最初のテレビを使用した完全中央制御方式で全カラー・コンデショニングを施した、近代味あふれる北電自慢のものである。またボイラー用水も石狩川から遠隔操作で揚水、荏原イフィルコのアクセレーター、イオン交換と近代設備をこらした完璧のものである。所長自らエレベーターを操作しての御案内により、地下から屋上まで詳細に見学させていただいた。午後 4 時見学を終え、国道 12 号線を帰途についた。途中札幌開発建設部の小野 修氏の御説明によつて、12 号線の舗装工事を所要所見学しながら一路札幌へ向つた。午後 6 時 30 分札幌市内東橋で解散、1 日の見学を終つた。

相当の長路（しかも悪路）を 1 日で走り、しかも北海道にもめづらしい寒さの中のこととて、見学者一同相当に疲労したようではあつたが見学の内容の充実していることにより、その成果は大なるものであつた。有意義な見学旅行を終えることができたのは関係者各位の御厚志のたまものと深く感謝する次第である。（丹保 記）

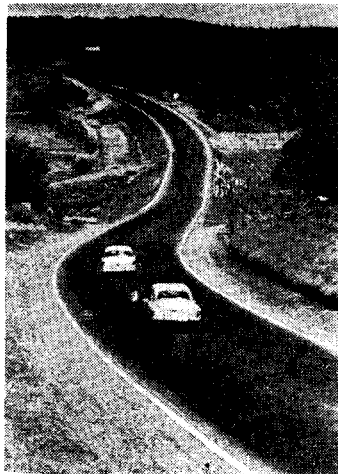
C 班（室蘭・苫小牧コース）

6 月 3 日（月）、4 日（火）の 2 日間で参加人員 101 名を得て次の日程で行われた。

6 月 3 日：札幌市～支笏湖～苫小牧緑ヶ丘公園～苫小牧市産業会館（昼食）～苫小牧工業港～王子製紙苫小牧工場～白老アイヌ部落～登別温泉（宿泊）

6 月 4 日：登別温泉～富士セメント室蘭工場～室蘭港～測量山～水族館（昼食）～洞爺湖見晴台～昭和南山～東室蘭～1 級国道 36 号線～札幌市帰着

写真—11 国道 36 号線



沼田団長（早大理工学部）以下総勢 100 名、板倉幹事長（北大工学部）、コース順説明のもとに貸切バス 2 台に分乗して札幌市を後に国道 36 号線を南下して一路支笏湖に向う。あいにくの雨模様のため、遠望きかず、名物のドームをこそみられなかつたが、緑の神秘

写真—12 苫小牧工業港



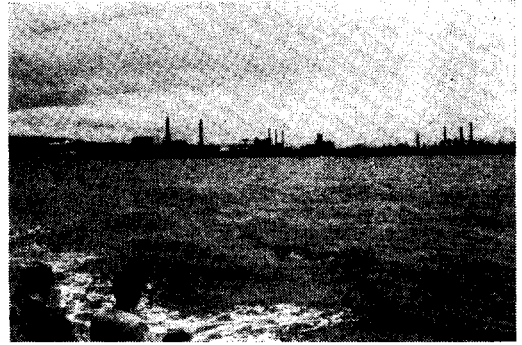
写真—15 富士セメント室蘭工場にて



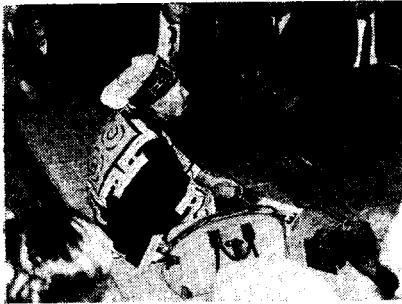
写真—13 登別地獄谷を見学する一行



写真—16 船上より見た室蘭港



写真—14 白老アイヌ部落にて



境といわれるこの支笏湖の自然美に対し、内地勢の感歎久しきものがあつた。

再び車中の人となり、典型的

な北海道美人のバスガイド嬢司会のもとに、車中演芸会となり、それぞれくり出す珍芸ぶりに時間のたつのも覚えぬままに苫小牧市に到着した。

苫小牧市においては、いわゆるアイストープ利用による漂砂の研究で有名な苫小牧工業港、東洋一といわれる王子製紙工場を順次見学、ついで白老アイヌ部落に小憩後、待望の登別温泉に向う。

ユーモアをまじえながら語る案内人の説明に耳を傾け、自殺の名所としても日本の三指に入るといわれる地獄谷の怪貌に、団長以下あらためて驚歎した次第であつた。やがて第一滝本館に旅装を解いた一行は、思い思いに東洋一の大浴場に、記念撮影にとそれぞれ小憩後、午後7時より開催の懇親会に臨んだ。

まづ、地元主催者の歓迎の辞の後、丹前姿の沼田団長立つて謝意を述べ、いよいよ盛宴に入る。あくまでも北

写真—17 昭和新山にて



海道情緒ゆたかな歓迎調に、大勢の綺麗どころのサービスぶりに、興趣ますますさかんに、はては成岡京大教授の自ら率いる京都代表勢の祇園小唄に、東北代表勢のさんさ時雨に、また、東京代表、九州代表とそれぞれ御国自慢の御披露におよび、つきるを知らぬ余情を惜しみつつ、土木学会万才三唱を行つて閉宴とし、自由行動に入った。翌朝、車中で登別小唄を覚えながら興さりやらぬ登別温泉を後に、第2日目のコースに入る。

高炉セメント製造の富士セメント室蘭工場見学後、船に乗つて室蘭港を一巡、ついで測量山より室蘭市を一望後、水族館に向う。

水族館では熊谷室蘭市長自らの歓迎の辞を受け、心づくしの昼食後、いよいよ最後のコースに移る。

虻田～洞爺湖～昭和新山～長流～東室蘭と強行軍であ

つたが、それだけにまた、緊張と感激の連続でもあった。東室蘭で若干の帰郷者と別れをつけ、暗闇迫る一級国道 36 号線をガイド嬢司会のもとに、北大寮歌や北海道民謡の斉唱、本旅行を通した感想等々、全く 2 日間をともにした会員相互の親愛の度、いやが上にもたかまり、和気あいあいのうちに一路札幌へと向つた。

(平岡 記)

D 班 (美幌・帯広・釧路コース) 6 月 2 日より 6 月 5 日まで、参加人員 86 名。

コース：美幌町～弟子屈～釧路市～糠平温泉～帯広市
6 月 2 日 (小雨)：21 時会員 86 名札幌駅に集合、21 時 30 分発網走行準急列車にて美幌に向かう。

6 月 3 日 (小雨後曇)：美幌町～美幌峠～屈斜路湖～川湯市街～硫黄山～摩周湖～弟子屈町

早朝 7 時美幌駅着、ただちに美幌ホテルに入り小憩の後、結団式を行い、全員一致で団長に福田武雄教授を推薦する。その後、美幌町長のユーモアたっぷりの歓迎の辞および、阿寒国立公園についての説明を聞きながら一同笑いのうちに同町の御好意による朝食をすます。

9 時、バス 2 台を連ね 2 級国道網走根室線を美幌峠に向かい出発。途中、ガイドの篤嬢の説明に一同昨夜の睡気もさめ、その美声に聞きほれる。峠にさしかかつたが夜来の雨のため天下の景勝もすつかり濃霧におおわれ、全く視界がきかず、払つても、払つても、キリのないキリ (霧) に一同無念の思いをいだきながら、亭々とそびえる針葉樹林の間を縫い、車窓より路傍の残雪を見ながら峠を下る。標高が低くなるにつれて、次第に霧が晴れ眼前にようやくして屈斜路湖を眺めることができた。

11 時、和琴半島着 (湖心に突き出た小半島)。湖畔に噴出する温泉を訪れた後、湖心荘にて野戦料理の豚汁に舌鼓をうちながら昼食をとる。13 時、同所出発、湖畔を回り野趣豊かな露天風呂・砂湯等を左に見ながら川湯市街を通過、14 時 30 分、硫黄山に到着し小憩。辺り一面のエゾイソ白ツツジ等の高山植物原、前方の轟々と白煙をたてながら硫黄を吹き出す山の景観に、一同嘆声を発しながら一せいにカメラのシャッターをきる。

車は白樺樹林を縫い、いよいよ待望の摩周湖に向か

写真-18 硫黄山



う。標高が高くなるにつれて、また霧が濃くなり視界が全くきかなくなる。絵葉書を取り出しているいと想像をめぐらす会員も出る。

展望台に到着したが、ついに天下の景観もその神秘を霧の奥深く秘めたまま、われわれの眼前には表われず、一同無念の涙をのみながら弟子屈町に向かう。

16 時、弟子屈温泉着。風呂にはいり昨夜からの疲れをいやす。

6 月 4 日 (曇後晴)：弟子屈町～釧路市～池田町～足寄町～糠平温泉 早朝 5 時、多数の提案により再び摩周湖を訪れたが、昨日同様、濃霧のため全く視界がきかず、一同ついにあきらめる。

8 時、いよいよ本見学会の難コースである道々弟子屈鶴居釧路線の突破に出发。昨年末道路が開通して以来、初めてのバスの乗入れである。

地中には、いまだ氷層を残し、凍上の傷の跡もいたいたしい悪路にもかかわらず、右手に雄阿寒岳の雄姿を眺め、北海道らしい開拓地・放牧地等に一同気をとられながら走る。10 時頃、丘陵地帯をぬけると一望千里の釧路原野に出る。新釧路川右岸築堤上の道路を時速 70 km 前後の快速で一路釧路市に向かう。見渡すかぎりのヨシ原 (泥炭地)、西部劇中の人のような気持になる。釧路開発建設部の担当官より泥炭地開発の説明を聞く。11 時釧路市着。春採湖畔にて、折から満開の桜花を鑑賞しながら名物のソバを食べ、12 時発上り列車にて池田町に向う。

15 時、池田駅着。再び 2 台のバスに分乗し道々幕別西足寄線を北上、糠平発電所 (糠平・芽登第 1・芽登第 2・足寄の 4 発電所) 見学に向う。途中、車内にて電発糠平建設事務所佐藤工事課長の説明を聞きながら走る。説明によると、この糠平系 4 発電所は総発電最大出力 137 500 kW、可能年間発生電力量 652 900 × 10³ kWh の発電をなすとのことである。17 時、足寄発電所を見学、続いて活込ダム・芽登第 1、芽登第 2 発電所を見学。19 時、糠平ダム堤頂の道路を越えて糠平温泉に着く。

電源開発 KK および建設関係会社の御好意で盛大な会食を行う。まず、電発職員の歓迎の挨拶があり、続いて

写真-19 足寄発電所



写真一20 足寄発電所水圧鉄管



福田団長が一同を代表しユーモラスなお礼の挨拶をされた後、自己紹介にうつる。宴たけなわになるにつれて珍談・珍芸続出し和気あいあいのうちに夜のふけるのも忘れ宴を張る

6月5日(晴) 糠平温泉～帯広市

11時出発。糠平ダムを見学、雄大な人造湖畔で対岸に雪をいただいた大雪山連峰を背景にして全員の記念写真をとる。熱心な見学は1時間余におよび、続いて糠平発電所・元小屋ダムを見学、12時同ダムを出発、2級国道弟子屈帯広線を南下し帯広市に向かう。途中、音更橋架換工事を見学、14時帯広市内を通過し、1級国道38号線の札内橋架換工事(橋長435.6m、幅員7.0m、PSコンクリート桁、桁長39.55m、1連5主桁11連)現場に到着。PSコンクリート桁の製作・架設状況を1時間近く見学し帯広駅に向かう。

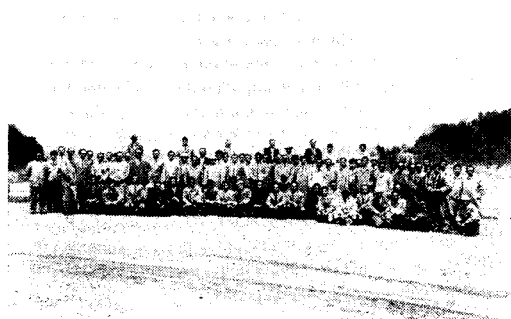
15時20分帯広駅頭にて解散式を行い、4日間の全行程を一人の事故者もなく無事終了して解散した。

今回の見学会は、一般に天候に恵まれず国立公園地帯の景観を十分満喫することができなかつたといううらみはあつたが、東部北海道の風情を十分に味わい、また、その開発状況の一端をうかがうことができたことは一同の大いに喜びとするところであつた。

最後に、本見学会に当り、特に美幌町・電源開発KKおよび同関係建設会社大林組、鹿島建設、熊谷組、伊藤組の諸賢に一方ならぬお世話になつたことを深く感謝する次第である。

(千葉・島 記)

写真一21 糠平人造湖畔で記念撮影



◎ 第1回理事会(昭.32.6.18)出席者:内海,平山新旧会長,米田,篠原,種谷の新旧副会長,東,飯吉,高坂,中安,逸見,国分,米屋,三島,梟山の各新旧理事,議事:1)5月中の行事その他報告,2)理事担当を次のように決定。

総務部長	東 寿	同次長	中安米藏
経理部長	飯吉精一	〃	高坂紫朗
編集部長	国分正胤	〃	丸安隆和
調査部長	高野 務	〃	逸見正則
研究連絡部長	米屋秀三	〃	三島慶三

3)他学協会との連絡担当理事を決定,4)フライアッシュ小委員会を設置し,その構成を次のとおりとする。(委員長)国分正胤,(委員)山田順治,有泉 昌,三浦一郎,水越達雄,平野生三郎,野瀬正義,関 慎吾,河原友純,高野俊介,左右田孝男,高橋泰介,渡部時也,本間 袖,光岡 彰,久木田 精,なお宇都興産KKに参加方勧誘すること。5)委員会委員交代および追加について, a) 論文集編集委員会

第1部会:(留任) 山口柏樹,山田順治,村上永一,安浪金蔵

(新任) 後藤正司,大地羊三,樋口芳朗,高田孝信

(退任) 岡本舜三,久保慶三郎,三浦一郎

第2部会:(留任) 村 幸雄,白石直文

(新任) 佐藤清一,栗津清蔵,嶋 祐之,井島武士,岡田篤也,松田暢夫,内藤幸穂

(退任) 本間 仁,吉川秀夫,林 泰造,岸力,関 慎吾,岩塚良三,左合正雄,長尾義三

第3部会:(留任) 福岡正己,市原松平,石上立夫

(新任) 谷藤正三,西亀達夫,比留間 豊,三木五三郎

(退任) 星 莖 和,白石俊多,伊丹康夫

第4部会:(留任) 春日屋伸昌,及川 知

(新任) 友永和夫,黒河内 浩,藤原 武,渡部与四郎,村上幸雄

(退任) 佐島秀夫,神田雄次,北岡寛太郎,大出満馬,井上 孝,今野 博

b) 土木振興対策委員会:谷口委員長病氣中,平山復二郎君に代理を委嘱する。学会側委員に篠原副会長を追加,種谷 実君は委員として留任

c) 土木設計管理小委員会:磯部照安君を幹事に委嘱

d) 原子力委員会:名称を変更するよう委員会に提案

(新任) 高野 務,国分正胤,三島慶三,種谷 実

(退任) 河北正治,平井 敦,梟山 正

(学会側新任) 内海清温,篠原武司

(〃 退任) 平山復二郎,種谷 実

6) 毎日新聞社学術奨励金申請者および 借成会学術奨励金申請者推薦については編集委員会に一任,7) Mr. Gail

A. Hathaway から平山会長あて書簡（太平洋および極東地域における各国の工学協会連合結成についての交渉団体）に対し日本工学会が適当であると回答すること、8）日本建設機械化協会参与について、9）会員入退会承認（別掲）。

◎ 各種委員会

1. 32年度第1回会誌編集委員会（昭.32.6.21）出席者：糸川委員長、坂野、森、伊東、南、栗栖（代小川）、尾形、粟津、八十島、久保、小林、奥田（代吉岡）、安藤、三上各委員、深谷幹事、岡本編集部員。協議事項：1）投稿原稿報告、2）原稿依頼状況、3）各号および各欄担当者を決定、4）42巻8月号掲載原稿を次のとおり予定した。

宮沢吉弘：欧米における長大橋梁の基礎工法について、橋 善雄・他3名：森の宮橋（鋼床版桁橋）の実験について、谷本勉之助：計算機の能率的な使い方、A.A. コロリュエフ（石村太助訳）：黄河三門峡ダムの設計概要、本間 仁：地下水講座（第1回）。

2. 32年度第1回会誌編集小委員会（昭.32.6.7）出席者：糸川委員長、梅木、安藤両委員、深谷幹事、岡本編集部員。協議事項：7月号編集につき最終的打合せを行った（増大号で120ページの予定）。

3. 32年度第1回会誌抄録委員会（昭.32.6.11）出席者：八十島委員長、岩間、垣中、高秀、高橋、西沢、沼田、松本、丸山、山田、湯浅の新委員、久野、二階堂、稲田各退任委員、山口幹事、岡本編集部員。協議事項：1）42巻7月号登載用として4編を予定、2）7月号文献目録を協議、3）抄録委員会内規および運営に関する覚え書を審議、4）その他。

4. 第3回土木設計管理小委員会（昭.32.6.11）出席者：平山前会長、比企委員長、中安、加納、仁杉（代）、畠山、久保、増山、近藤、塘、秋山、河野、大西（代）、吉田（越）、吉田（良）、野瀬（代）の各委員、磯野照安君。議事：1）平山前会長から比企新委員長を紹介後比企委員長あいさつ、2）幹事に磯部君を委嘱、3）磯部君提出の資料について業務内容を審議した。第4回同委員会（昭.32.6.25）出席者：比企委員長、豊田、加納、仁杉、久保、近藤、八十島、塘、秋山（代近藤）、大西（代）、畠山、増山、吉田（代山口）の各委員、磯部幹事。議事：1）技術士の専門区分について土木振興対策委員会からの諮問に対して種々審議の結果“本委員会は試験科目は事業別専門区分（科学技術庁案では都市および地方計画、上下水道、河川、港湾、水力、道路、鉄道、構造の8分科としている）とし、登録は建設部門一本とすることを希望する”と答申すること、2）仁杉委員から国鉄線の調査項目について説明、3）豊田委員から建設省における多目的ダム建設の場合の手順について説明、4）工事数量の算出と予備調査の精度等について議論があり、次回までに国際入札の具体的例を建設技研および日本工管から提出して貰うこと。

5. 第4回海岸保全施設小委員会（昭.32.6.12）出席者：

本間委員長、東、石原（代樫木）、佐藤、瀬尾、山内、渡部の各委員、岸、白石、中本、堀川、長尾、石綿の各幹事。議事：1）本間委員長から幹事会経過報告、2）各担当幹事から原案について説明、3）第3章について6月17日幹事会を開き再検討すること。同幹事会（昭.32.6.17）出席者：本間委員長外各幹事。議事：第3章および第4章の総合調整を行った。

6. フライアッシュの研究に関する懇談会（昭.32.6.20）出席者：吉田コンクリート委員会委員長、国分、関、河原、三浦（代杉木）、水越（代知久）、平野、高野（代土岐）、左右田、野瀬（代進藤）、高橋、渡部（代、浜、藤原、渡辺）、本間、光岡、久木田の諸氏。議事：1）吉田委員長から経過報告、2）国分氏から前回議事録について説明、3）試験方法その他について打合せ、4）河原氏からモルタルの強度比試験結果、フライアッシュの品質均一性に関する資料の説明、5）渡辺氏から各種試験結果の説明。

7. 第13回耐震工学委員会（昭.32.6.21）出席者：沼田委員長、岡本、友永、近藤、田原、東（代久保島）、村、畠山、平井（代）の各委員、久保幹事。議事：1）日本学術会議第5部地震工学懇談会の経過報告（沼田委員長、岡本委員）、すなわち日本学術会議から1960年に第2回地震工学大会を東京で開催するよう大蔵省へ要望すること、2）同懇談会委員追加について、3）研究発表会発表論文を詮衡スケジュールを決定（別掲）、4）本委員会委員に猪瀬寧雄（北海道開発局札幌建設部長）を追加のこと、5）英文論文を印刷することも考慮。

8. 第3回原子力委員会（昭.32.6.24）出席者：福田委員長、飯吉、神谷、高坂、国分、逸見、長山、近藤、藤原、種谷の各委員、白石（代）、高橋両幹事。議事：1）本委員会の名称を原子力土木施設委員会と改訂したい、2）委員追加原案どおり賛成、3）君島氏から遮蔽コンクリートの設計および施工、構造力学上の問題、廃水処理問題、保安の問題等の概要について概要を述べた、4）次回は7月下旬頃に安芸氏または岩井氏の話聞くこと、5）9月に東海村の原子力研究所を見学すること。

◎ その他

1. International Concrete Road Congress が、1957年10月16～19日間イタリアのローマで開催されるとの通知に接した。このCongressは世界最初の試みのようである。

◎ 日本学術会議その他関係学協会の動き

1. JSC 地震工学懇談会 を6月12、15、19日に開き、1960年に第2回世界地震工学大会を日本で開催するについて準備打合せを行った。

2. 衛生工業協会 では6月20日創立40周年記念祝典を盛大に挙行し、本会から篠原副会長が出席した。

3. 都市不燃化同盟 では6月28日わが国都心におい

てまれに見る地上9階、室数291、店舗39を有する大規模不燃高層アパート(日活不動産アパート)を見学した。

2. 中部支部 32年度役員の変更ならびに補充を次のとおり決定した。評議員 片岡紀一(幹事)、幹事 石井賢良、宮崎虎太郎(ともに新任)。第2回幹事会(昭.32.5.14)出席者:井上幹事長以下16名。議事:a)31年度決算について、b)役員会について、c)見学会について、d)6月行事について、e)7月行事について、d)会員調査について。第3回幹事会(昭.32.6.11)出席者:井上幹事長以下16名。議題:a)5月行事について、b)6月講演会について、c)学生見学会について、d)会員調査の結果について、e)総会について、f)学会誌編集委員の推薦について、g)7月行事について、h)8月行事について。見学会(昭.32.5.19)参加人員30名を得て長野県西筑摩郡の松下ダム(関西電力)および同発電所を見学。経過:11時20分中央線田立駅前集

合、バスで現場を視察の上馬籠の島崎藤村遺跡を探訪、16時中津川駅で解散。学生見学会(昭.32.5.31)信州大学学生24名の参加のもとに名古屋高速鉄道工事現場、上水道設備、名古屋港諸施設を見学。公開講演会(昭.32.6.12)名交会館にて約300名の参加者を得て行われた。題目:a)ボンベイ市営地下鉄道の建設計画とインドの風物について、b)最近における鉄鋼事情について。なお終了後「鉄」、「新らしい鉄」と題した映画を観賞した。

支 部 だ よ り

1. 東北支部 幹事会(昭.32.6.21)出席者:幹事長以下12名、議事:只見地区見学会諸準備について。
3. 関西支部 幹事委嘱報告(昭.32.5.28)(幹事長)近藤市三郎、(幹事)松尾新一郎、別所多喜次、成松清雄、川崎精一、神生秋夫。

土 木 学 会 支 部 所 在 地

北海道支部	北海道札幌郡豊平町平岸村字中ノ島
支部長 小川 讓二	北海道開発局土木試験所内
東北支部	仙台市北3番丁124 建設省東北地方建設局内
支部長 佐藤 清見	
中部支部	名古屋市東区東新町7の2 名古屋市交通局内
支部長 石田 二郎	
関西支部	大阪市西区土佐堀通2丁目 建設省近畿地方建設局内
支部長 稲垣 茂樹	
中国四国支部	広島市二葉の里 国鉄広島鉄道管理局施設部内
支部長 庄司 陸太郎	
西部支部	福岡市土手町6 建設省九州地方建設局内
支部長 田中 寛二	

昭和32年6月分入退会報告(昭.32.6.1~6.30)

1. 入 会 147名(正40, 准38, 学生64, 特1A-1, 特2級2, 特3級2)
2. 退 会 20名(正7, 准10, 学生3)
3. 転 格 62名(正より名誉員へ3, 准より正へ40, 学生より准へ16, 准より学生へ1, 特1より特1Aへ1, 特1より特1Bへ1)

会 員 現 在 数(昭.32.6.30.現在)

名誉員	賛助員	特1級A	B	C	特2級	特3級	正員	准員	学生員	合計	増加
23	30	8	6	52	95	110	7024	5025	1146	13519	127

正員	蒲池 浪 統 君	運輸省第四港湾建設局長	昭和32年6月4日逝去	享年52才
准員	広本 一 夫 君	航空庁名古屋航空保安事務所	昭和32年6月25日逝去	享年29才

昭和32年7月10日印刷

印刷者 大沼正吉
編集兼発行者 中川一美

定 価 100 円

昭和32年7月15日発行

印刷所 株式会社 技報堂
発行所 社団法人 土木学会

振替 東京 16828 番

土木学会誌 第42巻 第7号

東京都港区赤坂溜池5番地
東京都新宿区四谷一丁目(外濠公園入口)

電話 (35) 5138・5139 番